

白金霞

七月号



平成26年7月発行 第41号

白金葭定例会句会案内（＊は吟行句会）

八月十五日（金）蓮見舟吟行（手賀沼小池ボート9：30出

船）＊句会（12：00～15：00アビスタ第四学習室）

九月十九日（金）12：00～15：00アビスタ第四学習室

兼題：宵闇、竹の春

十月十七日（金）12：00～15：00アビスタ第四学習室

兼題：体育の日、無患子むくろじ、

終戦記念日の蓮見舟吟行の参考句（8月15日分）

玉音と蟬遙かなり蓮見舟

陽一

怖おつ怖おつ舳先紅蓮白蓮はちす

孝三

見つべきは見たり八月十五日

幸一

蓮酒を阿片患者のごとく嚙む

〃

敗戦の日を遠くして蓮見舟

多美子

棹でゆく静寂し^{しま}の時の蓮見舟

高志

月例会句会報（¹⁴／7／18 9名欠1 半夏生、麴、）

飯田孝三

蛇の首水面追ひくる直後^{すぐうしろ}

麴や満洲に嫁ぎそのまんま

青蚊帳やいつ寝ね起きてたらちねは

デユイを見てやアネモネ虞美人草
辻交ひに都電停ある半夏生

増田陽一

鴉啼き人語に似たり梅雨の底
螢蛾のゐる夕景を別れ来し
麴に噫せたり蟬の熄みにけり
バスタオルひとの形や半夏雨
離れ住むひとり初蟬聞きたるや

光成高志

「金魚や金魚」金属音の兼子の声（柳宗悦夫人）

中学生蜥蜴つかまへもてあそぶ
点々と白浮き立たせ半夏生
レタスマルチング八ヶ岳まで輝けり
麴を珈琲食^{うけ}に午後三時

光みち

燕十羽ラジオ体操始まりぬ
搔くほどに箸太りゆく麦こがし

図書館を停電させるはたた神
風吹けば蝶の白さよ半夏生
客来れば店の灯つける金魚玉

吉羽多美子

短夜の無限にながき介護かな
お絞りの熱さ固さも半夏かな
麴やおとうと生きてゐればいくつ

浅野正美

麴にむせぶ母の背さすりをり
半夏生草ひと叢白し沼広し
賑はひの去りてひとりの盆の家
夜に入りて雨音はげし半夏生
梅雨晴間ちよつと前掛替へてみる

倉田紀子

水馬近寄りすぎてはじき合ひ
はつたいを好みに練りて祖母の味
目をこらし見つけしめだか群れており
梅雨の蝶忘れぬものに童歌
半夏生木洩れ日求め白く群れ

青木啓泰

朝風に木の間あかるき半夏生
水中花夜の病棟に沈みゐる
沼風に半夏生草雨催ひ
鳥ごゑの大樹にこもる朝曇
高麗川の水の迅さや青胡桃
煮えてくる玉子の熱き半夏生
罪科の白さ葉が持つ半夏生

松村幸一

広島へ少し間のある半夏生
ワイシャツで駅を下りゆく半夏生
死んでまで顔を覗きし半夏生
世の中が平らに見えて麦こがし
草いきれ顎で止めゆく帽の紐
遠山と背くらべして桐の花
橡咲いて電飾みたいに坂の街

武者昭七

こはごと桑の実含んでる都会つ子

椽の花咲きそめにけり丸の内

麴に咽せては背中叩かれし

選句結果（数字は入選数 左添書きは添削句）

5 搔くほどに箸太りゆく麦こがし

4 蛇の首水面追ひくる直後すぐうしろ

4 ワイシャツで駄を下りゆく半夏生

4 風吹けば蝶の白さよ半夏生

3 梅雨晴間ちよつと前掛替へてみる

3 短夜の無限にながき介護かな

3 朝風に木の間あかるき半夏生

3 半夏生草ひと叢白し沼広し

3 お絞りの熱さ固さも半夏かな

2 賑はひの去りてひとりの盆の家

2 梅雨の蝶忘れぬものに童歌

2 草いきれ顎で止めゆく帽の紐

2 沼風に半夏生草雨催ひ

2 水中花夜の病棟に沈みある

2 青蚊帳やいつ寝ね起きてたらちねは

2 レタスマルチングハケ岳まで輝けり

（クールビズ）

2

椽の花咲きそめにけりスーツ脱ぐ

昭七

2

椽の花咲きそめにけり丸の内

幸一

2

麴やおとうと生きてゐればいくつ

幸一

2

客来れば店の灯つける金魚玉

みち

2

広島へ少し間のある半夏生

啓泰

2

水澄まし近寄りすぎてはじき合ひ

正美

1

水馬近寄りすぎてはじき合ひ

高志

1

「金魚や金魚」金属音の兼子の声

多美子

1

麴にむせぶ母の背さすりをり

孝三

1

デュフィを見てやアネモネ虞美人草

多美子

1

辻交ひに都電停ある半夏生

孝三

1

死んでまで顔を覗きし半夏生

啓泰

1

はつたいを好みに練りて祖母の味

正美

1

世の中が平らに見えて麦こがし

啓泰

1

麴を珈琲食うけに午後三時

高志

1

高麗川の水の迅さや青ぐるみ

紀子

1

高麗川の水の迅さや青胡桃

高志

1

点々と白浮き立たせ半夏生

正美

1

半夏生木洩れ日求め白く群れ

陽一

1

離れ住むひとり初蟬聞きたるや

幸一

1

煮えてくる玉子の熱き半夏生

昭七

1

遠山と背くらべして桐の花

みち

1

燕十羽ラジオ体操見てをりぬ

みち

燕十羽ラジオ体操始まりぬ

バスタオルひとの形や半夏雨

夜に入りて雨音はげし半夏生

鳥ごゑの大樹にこもる朝曇

椽咲いて電飾みたいに坂の街

罪科の白さ葉が持つ半夏生

中学生蜥蜴つかまへもてあそぶ

麴に噓せたり蟬の熄みにけり

目をこらし見つけしめだか群れており

こはごはと桑の実含んでる都会っ子

図書館の長き停電はたた神

図書館を停電させるはたた神

蛭蛾のゐる夕景を別れ来し

麴に咽せては背中叩かれし

鴉啼き人語に似たり梅雨の底

一句鑑賞

半夏生草ひと叢白し沼広し

手賀沼の沼辺の草むらに半夏生草がひと叢を占めて咲

いている。そこだけ白く見える。振り返って沼を見れば

葦間に水面が見え、対岸は遙か先である。半夏生草の白

さから季節感覚が立ち上がって読み手の心に達する。

陽一

多美子

紀子

昭七

幸一

高志

陽一

正美

昭七

みち

陽一

昭七

陽一

光成高志

多美子

風吹けば蝶の白さよ半夏生

朝風に木の間あかるき半夏生

みち

紀子

この二句も同じ情景を詠っていて、半夏生草のあり様がまざと目に浮ぶ。「蝶の白さよ」は半夏生草の白い葉のゆれるのを蝶に見立てたのであう。天辺の葉のみ半分白くなり、藁が垂れて、風にゆれている。周りの青蘆などとの対比によって、樹下の樹間を明るくしたように感じられたのだ。紋白蝶が一杯飛んでいるさまを想像すると、両句とも半夏生を見た瞬間の驚きが伝わってくる。ところが、陽一さんによると、元々奄美大島にいるアカボシゴマダラ蝶が関東でも見られるようになり、蝶マニアなどが驚いているとか。沖縄で見たゴマダラ蝶とは違うそうです。白には明るいイメージがあるが、空虚感もある。その両方が半夏生の季節感ではなからうか。とかなんとか書いてきても、やはり昭七さんの鑑賞に敵いません。

短夜の無限にながき介護かな

幸一

短夜の季節感万葉集から詠われており、近世になり芭蕉の嵯峨日記「夏の夜や木魂に明る下駄の音」があり、なんと言っても蕪村の短夜の沢山の句、例えば「みじか夜や芦間流るゝ蟹の泡」などは伝統的な短夜の時鳥の声も後朝の情緒も、さらに夏の夜の短いこと自体さえもかわりなく、短い夜ににじむ薄明の光、縹渺として不確かな効果に焦点をあて、それがしばしば水の映像とひと

つになつて生のすがたを、それは方丈記の「淀みに浮ぶうたかたはかつ消えかつ結びて、久しくとどまりたる例なし。」の冒頭の一節を連想させ、そこに中世的無常感がまわりつく。これが短夜の詩情の伝統である。長い前置きになつたが、掲句はそうした伝統的詩情を根こそぎ引剥がして、短夜が明けても、はたまた長き夜になつても、無限に長き介護は続くのであるなあ、嗚呼晴、という嘆きを通り越して、生きるということのなんと、かなしいことであるかの思いが垣間見える。まことに現代ではないか。二月号(36号)にて介護百人一首の紹介をしたが、俳句ではこうなるのである。かなの切れに無限大の人生の起伏が感じられる。

一句鑑賞

飯田孝三

バスタオルひとの形や半夏雨

陽一

バスタオルの主は不在である。だが、衣架ハンガーにかけられたバスタオルが、一瞬、人が纏まとっているように見えたのである。お宅を離れご療養中の悦子さんの姿を、ふと感じられたのだろう。あたりはまだつゆ明けぬ半夏の雨が煙る。切字「や」に、言葉にならぬ思いが籠こもるのである。

搔くほどに箸太りゆく麦こがし

みち

「麦こがし」は「麦炒粉」ともいい、関西では「はっ

たい」。炒った大麦粉に砂糖を混ぜ、そのままか水(湯がいいですよ。みち)に溶いて食べる。く「ほどに」く「太りゆく」は、巧まらず口をついて逸。水に溶き、箸で搔きまぜ、麦こがしが練り上がる(さっさと混ぜて粉がまだ残っているぐらいがいいですよ。高志)さまがありありと見えってくる。みちさんは、今や珍しくなった麦こがし粉を取寄せ、句会の席で配られた。お宅できつと「麦こがし」をつくられたにちがいない。粉を溶くお手もとに、往時、母許がりの思い出が甦るのである。歳時記などの例句は、「麦こがし」を梃とする、回想風の人事句が多い。掲句は違う。「麦こがし」を直にし、寡黙、抱懷する。同じ直詠に「鉢の底見えて残れる麦こがし」(虚子)がある。

お絞りの熱さ固さも半夏かな

幸一

暑い日には、固く絞った熱いお絞りがなによりも嬉しい。まして梅雨まだ明けぬ、鬱陶しい半夏である、思わず顔に当てると(人前では不作法ともいわれるけれど)、ほっと息をつぎ、生き返った気分になる。そりやあ手を拭うだけでその幾分かは。それにしても街のレストランなどでは、お絞りのサービスは珍しくなった、でも冷たいもの。熱いお絞りが恋しくなる。「かな」が面目、中年以上なら今も肌身に残る実感である。

レタスマルチングハケ岳まで輝けり

高志

マルチングが藁(マルチは敷藁、奄藁)やビニールな

どで畝を覆う野菜の栽培法。それを知らなかったため、互選ではとれなかった。よりポピュラーなビニールハウスの方が通じ易いが、敢えて、動名詞形を活かし、八ヶ岳の麓に到る野菜栽培の広景を目に物見せるのである。「輝けり」が面目躍如、延々ビニールマルチングの列と八ヶ岳の嶺々が、高原の澄んだ空気に照り映える。

麴に咽せては背中叩かれし

昭七

麴は関東では麦こがし、大麦を炒つてこがし、碾いて粉にしたもの。炒つてあり香ばしい。戦前戦中を知る者には、懐かしい三時のお八つだが、よく噓せる。作者も筆者も昭和一桁生れ、腹を空かして帰ると、家に麦こがしが用意され、匙で掬って食べたものだ（なめたと云った方がいかもしれない）。その度に「咽せては背中を叩いてもらった。そのことが思い出されるのである。喉に浮かぶのは母うえだろわか。

広島へ少し間のある半夏生

啓泰

「広島」は原爆被災の日、原爆忌である。「半夏生」は夏至の三候、七月二日ごろ。その日、今年も間もなく原爆の日が巡ってくるのだ、とあらためて思い知る。「少し間のある」はその日までの日数をいうのではない、被爆者はじめ日本人の胸底にある思いをつくづく反芻するのである。重い一句である。

（出句一覽掲載順）

一句鑑賞

武者昭七

風吹けば蝶の白さよ半夏生

みち

流麗なりズムと清澄な情景とが重なり合った典雅な句である。半夏生は水辺に多い涼やかな初夏の花。なによりもそのハンゲショウという響きがいい。水面にさざ波を立てて風が渡る。風を受けて白い葉が乱舞する蝶の群れのように一斉に揺らめき立つ。「蝶の白さよ」という詠嘆に作者の感動が踊っている。「風吹けば」とは半夏生と風との交歓のさまをいうのであって文法的な因果関係をいうのではない。一読さわやかな初夏の情景が伝わってくる。

蛍蛾のゐる夕景を別れ来し

陽一

物語の中の一情景を髣髴とさせる句である。俳句という短詩形でも十分に物語を語ることができることをしめしてみせた。どんな物語を読みたるかは読者の器量である。別来たあとの夕景が美しく切ない。甘美な余情が滲む。

麴にむせぶ母の背さすりをり

多美子

はつたいに咽て母や姉の背中をさすられた覚えは僕にもある。思えば遠いむかしである。はつたいの味も匂い

も久しく忘れていた。思い出したのは兼題のおかげである。さすってくれた手のひらのぬくもりがなんともうれしかったものだし、今も懐かしい。家族というものを意識した最初だろうか。此の句、はったいに咽んだ自分の背をさすってくれた母の背を今度は自分が摩る番になったのである。摩りながらどんな思いが作者の胸をよぎっただろうか。

麴を珈琲食^{うけ}に午後三時

高志

午後三時は「お茶の時間」である。「はったい」にこーひー」の取り合わせと来ては「コーヒーブレイク」というべきか「お茶」というべきか。初めて出あった組み合わせであるけれど、なかなか乙なというかモダンないうか面白いとりあわせである。はたしてお味のほうの満足度は如何。作者の高笑いが聞こえてきそう。暮らしの達人である。

ハガキ句（42報）管見》

（平 20・12・22）

モナリザを路上に売れり十二月

高志

「売れり」がうまい。路上に売られるモナリザを瞥見、一瞬、口をついた句。モナリザなど泰西名画のコピーを繁華街の路傍に売る光景は、よく見かける。ふと、湧く、感興を「れり」で吹つきり、氣息絶妙。十二月、又、画もモナリザなりせばの感興である。仮に「売れて」、「売

りぬ」では、重くれ、抜けぬ。「に」く「れり」のイ母音の押韻が興を深め、「十二月」の客観の措辞が決まる。（師走く、「年の暮」等ならば俗。）

赤好みにてボージョレの新走り

陽一

中「にて」の抜けつぷり、鮮やか。栓の抜けた音して快。ボージョレは、赤で乾杯！

海鼠嚙む討ちたき人はもう居らず

敏子

あら、憎い。あの人逝ちやった。え？討ちたき思いって、どんな思い？ ん？海鼠嚙んだことないの？ いや、そりや……。ともあれ、「海鼠嚙む」には、参った。えも言えぬ。更に、結「ず」が絶妙。「ぬ」ならば、恨みが残る。討入りの日の雨となり流れけり

白木

「例の会」当日は、旧暦、「義士討入りの日」。それから、遙かの日月を振り返る。時移り、「雪」ならぬ「雨」が恩讐を流し去る。会当日は確か雨。「流れけり」の軽快は当意即妙。

皿割るる音して年の逝きにけり

哲也

「皿割るる」実感が、寒々、身に迫る。二〇〇八年の暮である。

神棚へ年末ジャンボ狐福

多佳子

狐福は思わぬ僥倖。「狐」が「狸」にならぬよう祈るばかりである。「神棚へ」の、「に」ならぬ「へ」の機微が妙。臍である。

仇討ちは御法度牡丹焚火かな

妙子

牡丹焚火に映る人影は、主の仇討ちに集う義士の面々か。なに！ 仇討ちは、今や、御法度？ そう、だから

ハガキ句四十二報（08／12／15）

日に揺れておんぶばつたの舟溜り

孝三

余生なきものに天皇白鳥浮く

〃

家々や夕日受けたるつるし柿

百合子

例の会（12／14）

皿割るる音して年の逝きにけり

哲也

舞ひ狂ふ枯葉よ四十七士の日

春美

仇討ちは御法度牡丹焚火かな

妙子

潔白を言い切る男懷手

たか子

赤好みにてボージョレの新走り

陽一

討入りの日の雨となり流れけり

白木

海鼠嚙む討ちたき人はもう居らず

敏子

白鳥を見て雑踏を帰りけり

裕子

神棚へ年末ジャンボ狐福

多佳子

モナリザを路上に売れり十二月

高志

モナリザのうしろ果てなき冬野かな

不憫

だ。あなたには、見えぬ？ ほら、火影の奥の人影が。

「牡丹焚火かな」と言ってるだろ。「かな」と。

舞ひ狂ふ枯葉よ四十七士の日

春美

「枯葉よ」といえば、わが世代、イヴ・モンタン。それはそれ、風に舞う枯葉に、運命の弄ばれる「義士」の姿を重ねる。

白鳥を見て雑踏を帰りけり

裕子

「白鳥」と「雑踏」の対照が見せどころ。静騒、清濁、聖俗等、常套臭あり、損。ために、句形すつきりも、「けり」があまり利かない。

潔白を言い切る男懷手

たか子

潔白を囁く男の横顔が見える。ただ、言い「切る」とまでいい切るのは？「潔白」も具体的な方が。例えば「おりや知らぬと言ひぬる男」あたりか。

家々や夕日受けたるつるし柿

百合子

見える。でも、〃「たる」は重くないか。〃を受けて「だろう」か。

モナリザのうしろ果てなき冬野かな

不憫

絵の解説臭が先行するくらいあり、損。「〃果てなき」で「冬野」が不発。

（妄言多謝）

（駄句近作）

孫の手を帰りに買うて酉の市
抽子湯たぶ男恰幅なかりけり

先号、拙句「余生なき」は、偶々、昭和天皇のご生涯を思ひ、ふと口をついた作ですが、折しも、今上陛下の不例が報じられ、誤解のおそれがあります。ゆえに、只今、不適です。

新年句会のご案内を有り難うございます。ぜひ加えてください。以上

お便り広場（到着順、敬称略）

白金霞六月頂きました。我孫子日記、光成さんどこかご病気ですか？くれぐれも御身体を御大切にして下さい。毎回私の句についての御批評ありがたく頂いておりますが、なかなか実力があがりません。まあまあ元氣なのがとりえです。相変わらず駄本を読んでは忘れの毎日です。我が家の東南に木造三階建てが工事中です。皆様の益々の御活躍を祈ります。

（7・1 小山陽也）

前略 遠方からの旅先で出逢い、我が家の畑仕事の様子を俳句にして頂き、一句一句に情景を思い浮かべて読ませて頂きました。ありがとうございました。これからも益々すばらしい作品を俳句にして頑張つて下さいね。本日レタスを採りたてですので、早速送らせて頂きます。奥様にもよろしくお伝え下さい。（7・3 野辺山の坪井）
俳句会誌「白金霞」を送って下さり有難うございます。読ませて頂きました。陽也という俳号がありました

小山陽也さんのことですね。小山さんは高齢にもかかわらず頑張っていると思います。光成さんは勿論のこと奥様の句もありましたが、奥様は多才な能力を持つておられる方ですね。光成さんの女性を見る目は確かでした。ページは十六頁ですが、まとめるには相当な時間と労力を払われたことでしょう。70歳代になってもこれだけのエネルギーがあるのは、驚きというか、凄いと思います。

また、光成さんはホームページを開設されていますが、更新するのも大変な作業だと思います。俳句に対する思い入れは、すさまじいというか、我が命ですね。（中略）尚、金子琢磨君の絵画個展は無事に終えました。まあまあ盛況だったと聞いています。今後とも金子琢磨の活躍を見守って下さい。光成さんは俳句が主ですが、絵画についても会誌で述べておられますね。俳句と絵画は共通する部分があるとは意外でした。今後とも光成さんのホームページを閲覧させていただき、光成さんの活躍を見守り、私も負けぬように自分の趣味に精を出そうと思います。俳句を続けるためには、体が健康でないと出来ません。私も健康には気をつけますが、光成さん、奥様とも体に気をつけて夫婦の俳句共同活動を続けて下さい。

草々

（平 26・7・11 土屋 健）

すっかり御無沙汰しておりました。今日十四日お坊さんが読経に見えました。会費同封します。古代は別便で

す。今月の兼題が半夏生でした。一ヶ月間違へました。今月はお休みさせて下さい。九月から心気一転いたします。とにかく前向きに生きなさいと忠告されました。どうなりますかわかりませんが・・・今後ともよろしくご指導の程お願い申しあげます。字も乱筆になりました。もう少しキチンと書きます。(7・14 小山陽也)

いつもお手数お世話・お手数になっております。暑くなりましたね。御自愛下さい。浅草はおずき市のほおずきが着き和んでいます。(平成26七月13日青木啓泰)

先の例会ではお世話になりました。お礼申しあげます。珍しいはつたい粉と無患子をいただき感謝々々。無患子の実物を見るのはたぶん初めて、

これがほう無患子聞こゆ羽子の音

三白草見に三婦一丈沼畔(＊半夏生草をご踏索と伺って
麴をなめてポチにもちよつとやつて

梅雨明けが間近のようですが、その先の酷暑が思いやられます。ご夫妻共々、どうぞ御身をいとわれ、ご健吟なされますよう念じあげます。(平26・07・21飯田孝三)
(＊半夏生草はみち、正美、紀子、多美子の女性陣が見に行かれました。私は一緒ではありません。)

受贈誌(七月号)

捨棚田何作らずも草を刈る(彩117号)

平野ひろし

噴き上げて手筒花火は火の飛沫(〃)

〃

雪折の枝の累々砂防ダム(〃)

平山三郎

地に触れむばかりの雪庇講者宿(〃)

〃

呆けてなどをれず八十路の雪を掻く(飛行雲71号)

駿河岳水

墨堤めぐり来て桜餅茶屋に坐す(〃)

〃

床屋より向かふ東大五月祭(あすか七月号)

山尾かづひろ

野辺山特別作品(146/1456/15)

光成高志

＊光みち

郭公や二輦電車の小海線

＊

小海線青胡桃又青胡桃

松蟬の声の波電波観測所

育苗ハウスレタスのみどり一面に

レタス畝スプリンクラーで水を撒く

四歳の孫は蝶追ふレタス畑

＊

サンガラス掛けて農夫のレタス採り

〃

マルチング股挟みしてレタス採る

それぞれにナイフ一刀レタス切る

＊

レタス採る切口上に置いてゆく

〃

レタス採るその切口の並びたる

レタス採るその切口に乳滲む

黒布なる日除けの頭巾レタス採り

レタス採る膝行前進六人衆

レタス甘しレタス畑に立ち噛めば

フィリピン人も主も日焼レタス採る

貰ひたるレタスを抱いて句を作る

浅間山頂上見えてレタス採る

レタス畑所々に藜立つ

ダンボール箱にきっかりレタス入る

雉一声中を郭公鳴きつづく

出荷場休日返上レタス来る

俳窓評論纂

＊陽一さんから、吉野秀彦句集「子雀」をもらった。

平成21年から24年までの四年間300句を収めた第一句集である。高野ムツオ主宰の「小熊座」に平成二二年に入られて今、同人である。現在足立区の炎天寺住職である。

一茶ゆかりの寺として、全国小中学生俳句大会を主宰されている。次の＊に載せる飯田孝三さんのお孫さんの俳句もあり、また炎天寺は武者昭七さん宅から近いという

＊

＊

〃

＊

ことでご存知であり、仄々と親しみが感じられた。俳句を抜いてみる。

誕生日淀みにありし花筏

冷蔵庫の唸りにもあり今朝の秋

一言居士ばかりの通夜の夜長かな

マイケルの雄叫び消えて星月夜

プッシュホン押されたように梅の花

平成の白詰草敷き多賀城址

白鷺の首が伸び切る青田かな

秋の雷猫の肉球軟らかく

休日のシヨベルカーにも春の土

美しき目玉焼なり梅雨晴間

プッシュホンの句は、高野ムツオさんが童心の句として序文に取り上げた句、白鷺の句は、誓子先生に「青き田に立ちて白鷺首伸ばす」の句があり、この違いをよく味わうべきであると思います。同じ言葉を一句の中に二度使うリフレインの句がかなり多いこと、それに主観的見立てが多いなど、住職としてこれからの俳人と思われる。妄言多謝。

＊「子どもと楽しむ 俳句教室」金子兜太監修の本を孝三さんから頂いた。みちさんと私が中学生に俳句を教えていることをご存知であったからと、お孫さんの句が例句として掲載されている本だからである。

夕立で水やり休むお母さん

飯田裕介（小3）

夕立や草葉を掴むむら雀

与謝蕪村

の句の下に

紹介されています。昨秋、別所線で偶然会ったお孫さんでありました。賢そうな少年の顔が思い浮かびました。

この本は小学生用に書かれてあるようですが、中学生にも通用すると思います。故嘉久先生にも同様の指導書を借りたことがあります。その要点をメモしてありますが、今回頂いた本は、系統だって一から十まで書いてありますので、参考書として適当だと思います。みちさんと私は、小中学生の俳句授業をもつてもう十年を越しました。専門俳人から、「子供に俳句は教えられない！」と一喝されたことがあります。私はそうであつても、俳句の心は教えられると思つて我慢して教えています。裕介君！どうかご祖父様に倣つて長く続けて下さい。

芭蕉の軽み以後（34）

光成高志

命なりわづかの笠の下涼み

桃青

西行の「年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山」の歌が下敷きになった句である。炎天下の小夜の中山を越えようと来たが、木陰が少ないので、木の下の下涼みではなく、笠の下の僅かな蔭を命と頼んで、涼んでいることだというのである。「命なり」と唐突にはじめに出したところ、談林風というより、先の西行の歌

からいじけた心持がでているのではないかと思う。さらに行くくと、御油と赤坂の宿駅に至り

夏の月御油より出でて赤坂や

桃青

夏の月が出たかと思うと、すぐ入ってしまう。その短いことは御油と赤坂の間の短いのも同じだなあという感動が入った句である。二十年経った後でも、ほのめかす句としてこの句をあげているので、芭蕉が気に入った句であつた。御油に着いた時は、丁度月のよい晩あつた。次の宿までは僅か十六町なので、夕月夜に興じて足を伸ばし、赤坂まで行つて宿をかりた。お大尽などは、御油に泊つて一夜を楽しんだ後、たつた十六町行つた赤坂でもまた女遊びをするのだろうと、当世風物を裏に持っているから面白いのだろう。どうも、桃青は、「貝おほひ」の世界やまた遊蕩気分の横溢とした時代をどうかして抜けないればと考へていたような節がある。

郷里の伊賀上野に着いたのは六月二十日であつた。親族旧友に迎えられた。高畑市隠と山岸半残は芭蕉の帰郷を待ち構えていて、それぞれの宅に招待された。市隠はかつての同僚で、特に懇意な間柄であつた。早速杉風との両吟歌仙を土産に贈つた。

富士の風や扇にのせて江戸土産

桃青

何の土産も用意できませんでしたが、富士山の麓を通りました時なんともいえぬ涼しい風が吹いてきたもので

すから、富士の風を扇にのせて土産にしますという俳味溢れる句である。何故というに、物を贈る時は白扇に載せる風習を踏み、富士山は白扇にもたとえられるので、富士の風を扇にのせて扇を差し出せば、富士山と風を土産にしたことになる。受け取った市隠はなるほど、これは涼しい、富士の風は格別だ、と言って扇から風を送ったに違いない。軽妙なそして諧謔の効いたやりとりである。山岸市隠の宅では、

百里来たりほどは雲井の下涼み

桃青

「ほどは雲井」は伊勢物語にある「忘るなよ程は雲井になりぬとも空ゆく月のめぐりあふまで」（11段）から取っている。旅をして空のあなたにあなた方と遠くへだたってしまうても、その空を行く月がまたもとの所に戻ってくるように、再びお会いする時まで私のことを忘れないでゐて下さいという歌である。

旅のうたを読む vi — 白秋の落葉松 —

武者昭七

からまつの林を過ぎて

からまつをしみじみと見き

からまつはさびしかりけり

旅の詩といえは多くのひとが思い出す詩のひとつである。日本近代詩の名篇とされる北原白秋の「落葉松」

全八連のうちの第一連である。ここにはすでに全編に流れる寂寥、静謐、旅情などの情趣が全部出そろっている。流麗な五七調という古典的なリズムに加えて「林を過ぎて」「しみじみと見き」「さびしかりけり」などの哀感を誘う措辞がそれらの情緒を見事に演出している。そういう点から言えば「落葉松」一篇はこれだけで十分に完成された詩であり、これに次ぐ他の七連（第五連を除いて他は省略した）はそれらの情趣の冗漫ともみえるリフレインに過ぎないといえる。

からまつを林を過ぎて

ゆゑしらず歩みひそめつ

からまつはさびしかりけり

からまつとささやきにけり

「からまつとささやきにけり」は落葉松が落葉松とささやいたととる読みもあるようだけれど旅人がかたわらの落葉松とささやき交したととりた。自然に靈性を感じ自然と交感することに理想や喜びを抱き続けたのが僕らの先人たちであつたからだ。

白秋は「読者よ、これらは声に出して歌うべききわのものにあらず、ただひびきをひびきとし句いを句いとせよ」と注したというが、写真や実像を離れ「気分」につくものが象徴詩であるとすれば「落葉松」一篇はその到達点であろう。（2014・02・12）

増田陽一句集「ファールブルの机」鑑賞（3） 光成高志

秋立つや花屋の窗の花挿蝶

などは蝶の収集家である陽一さんの眼でないといけない句。お宅の収集蝶を見せていただいた時、「どうです」と言われて何ともいえなかった。花屋の窓の花にせせり蝶が来て止っている構図でしょうか。一文字せせりは立秋以降の八月末に急に数が増えるとか。そこに季節感があるのです。

ここで陽一さんの版画の「モアレ」の技法にふれねばならぬ。これから觀賞するカタカナ語のある句について見ていく時に必要なのだ。硬表紙の陽一版画の写真版2冊をいただいた。中に作品の讃が書かれてある。一人は昆虫協会长さん、もう一冊は美術評論家の方である。

後者の瀬木慎一さんのまえがきに、そのモアレの説明がある。細かい着物の柄から光線が当たると目にちらちらする別な模様が浮かび出たりするのを見た事がある。そういう現象もモアレというであろう。また、みちさんによると、脊椎検診の中で側彎症の検診をモアレ検診と呼んで、特殊な物を当ててレントゲンを取ると波模様が対称に出るのが正常で、非対称に出ると異常と診断されるそうです。このモアレも波模様という意味でフランス語を用いているようです。形象の形や配置、それにどこにモアレを出すかなどに陽一さんの独自性と芸術的センス

が発揮されるのでしょうか。お互いの形がモアレを伴って干渉される所に、暗喩が発生する。その暗喩、喩えの解は鑑賞者の自由である。こういう風に書いてくると、それは俳句の一技法と同じである。特に現代俳句作家はそこを重視して俳句を作る。それはのめりこむと面白いが、一般の読者には難解になる。作品の題名は植物系として年月の付帯したものがほとんどである。昆虫の羽模様の名前ではありません。手賀沼の蓮の蕾に見えたりする作品もあります。とにかく線刻の形象の配置で以て暗喩を発生させ、そこに鑑賞者の自由を与えている作品を作られる陽一さんの謙虚さというか、思いやりを感じます。そこに私なんか非常に日本的なものを感じます。一見平面的でそっけないように見えて、浮かび上がってくるモアレについて、作者の意図を消しているところをそういう風に解釈しました。陽一さんにとって、俳句の骨法を押さえれば、暗喩を生み出すことはモアレの応用として、言葉の上でのことだから、普通の作家より容易ではなかったでしょうか。取材旅行や昆虫採集旅行での海外詠もその技法を使って深い暗喩を解き明かさなければ、句も觀賞できないでしょう。できるだけそのことにチャレンジして見ましょう。

05（6）1・

我孫子日記

6／20例会。6／22＊江東区文化センター。6／28自治会&防犯セミナー。7／3＊2久寺家中。7／5六本木サントリー美術館↓＊3ブックフェア。7／11＊4お台場海浜公園↓防犯パトロール。7／12白樺文学館。7／18例会。

＊小4の「運命」を聴く梅雨青し

高志

＊2中学生トカゲ難なく掴まえて

〃

＊3半夏生埠頭に麒麟クレーン立つ

〃

＊4人工の渚に氷旗ひるがへり

敬司

お台場や子育てせわしつばくらめ

一艸人

パリー祭昭和の店を徘徊す

敏子

青松青芝石垣台場なり

高志

台風一過埠頭に並ぶクレーンかな

たけ子

人工渚犬の飲み水冷しあり

良子

編集後記

昭七さんの鑑賞文にて過褒な言葉を頂きほんとに恐縮しております。近所の農家の生活を見てゐて、又、先

月の野辺山のレタス農家の作業を見てゐて、皆必死に生きていることがわかります。全部ひつくるめて、五七五の俳句に生かすことは、廻りの生きとし生けるものを愛し、文芸を信じ楽しむころばへがあつて初めてなし得るものと思っています。「文台引き下ろせば即反古也」の覚悟が楽しいものに思えてきます。

どうか文章にてどんな話題でも交歓できることを願っておりますので、毎号後記に書いておりますが、原稿を寄せて下さいませ。

白金霞 第41号 平成26年7月発行

編集・発行人 光成高志 (TEL & FAX 04・7187・1068)

発行所 〒270・1119 我孫子市南新木2-14-17

表紙の題字…加納綾女。写真は白金霞